

國學院大學學術情報リポジトリ

「聞く」の引用句に係助詞「なむ」があるということ

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學国語研究会 公開日: 2025-06-02 キーワード (Ja): 係助詞「なむ」, 「聞く」の引用句, 聞き手指向性 キーワード (En): 作成者: 近藤, 政行 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001698

「聞く」の引用句に係助詞「なむ」があるということ

近藤 政行

キーワード…係助詞「なむ」、「聞く」の引用句、聞き手指

向性

一 はじめに

「聞く」の引用句に係助詞「なむ」の入った例が、次のように、見られる。

- (1) ある国の祇承の官人の妻にてなむあると聞ききて、
(伊勢 六十段 143)
- (2) 僧都はかくなんと聞き給ひて、怪しきものから、うれしとなんおもほしける。
(源氏 紅葉賀 242)
- (3) 今年なむ七十に成り給ひけると聞き給ひて、
(落窪 卷の三 203)

(4) 「汝ち不知ずや、実には、我が妻懐妊せり。而るに腹に病有るに依て、「猿の肝なむ其の薬なる」と聞て汝が肝もを取むが為に謀て将来れる也」と。

(今昔 卷五の二十五 461)

この場合「なむ」が係り結びを構成するか終助詞的に用いられるかを問わない。これまでこのような例は特別注意されなかつたのであるが、本稿はこのような例を問題とし、考察したいと思う。

なお、「聞く」の引用句には、
(5) 「確かにその人とは言はずや。かしこにもとよりある尼ぞとぶらひ給ふと聞きし」 (源氏 浮舟1866)

(6)「多武の峰の増賀聖人こそ止事無き聖人にて在すなれ」と聞きて、
(今昔 卷十九の十 86)

のように、係助詞「ぞ」や「こそ」が入った例も見られるが、「ぞ」や「こそ」には、あとで述べる聞き手指向性が認められないので考察の対象とはしない。

資料には平安時代から鎌倉時代までの文学作品(注2)を用い、用例は「聞く」のほか尊敬語「聞こし召す」謙讓語「承る」についても調査した。その結果を表に示す。

表 「聞く」「聞こし召す」「承る」のそれぞれの引用句に「なむ」がある用例の数

	聞く	聞こし召す	承る
竹取物語	0	0	0
伊勢物語	1	0	0
蜻蛉日記	10	0	2
枕草子	3	0	0
源氏物語	14	1	0
紫式部日記	0	0	0
落窪物語	3	0	0
夜の寝覚	2	0	1
更級日記	1	0	0
狭衣物語	3	0	1
今昔物語集	3	0	1
とりかえばや物語	0	0	1
宇治拾遺物語	0	0	0

「聞く」の例は示したので「聞こし召す」「承る」の例を挙げておく。

(7)「……兄の右馬の頭にて人がらも殊なる事なき、心かけたるを、いとほしうなども思ひひたらで、さるべきさまになん契る」と聞き召す便りありて、

(源氏 蜻蛉 1975)

(8)「……いとうれしくなんのたまはせしとうけたまはれば、喜びながらなんきこゆる。……」

(蜻蛉日記 下265)

(9) 殿はまづ、入道の御方に参り給ひて、「例ならぬ御有さまになんとうけたまはり、……」などきこえ給へば、

(夜の寝覚 卷四 314)

(10)「聞えさせしいもうとの、患ひ侍けるが、限りになりてなん」と、うけたまはりしなん、「今一度逢ひ見んと、……」

(狭衣 卷三 243)

二

「聞く」の引用句に「なむ」があるのがなぜ問題であるかを、「聞き手指向性」とムードの観点から述べる。

まず聞き手指向性とは、森野 崇(一九九二)に、「具体的聞き手の存在をその使用の前提とし、その聞き手に向かつてはたらきかけていこうとする性質」(13ページ)と述べられているもので、「なむ」はその性質をもつとされる。その「なむ」が「聞く」の引用句にあるという不整合さは、これも聞き手指向性をもつ現代語の「ね」が次のように用いられたのを見れば明らかだろう。

(11) *「今日もいい天気だね」と聞いた。(この「聞く」はもちろん「尋ねる」意ではない)

これが、次のように、一旦「いふ」で受けてそれを「聞く」で受けるのなら理解できるが、直ちに「〜と聞く」で受けるのはやはり疑問である。

(12) 「これなむ都鳥」といふを聞いて、(伊勢 九段 117)

(13) 「早う失給ひにしかば、夜前なむ鳥部野に葬し奉てし」と云けるを聞けむ隆経の朝臣の心こそ、

(今昔 卷三十一の九 457)

ところで、(11)は許容されないが、次の(14)のように「ね」を伴わなければ自然である。

(14) 「今日もいい天気だ」と聞いた。

このことについて、藤田保幸(二〇〇〇)は、「雨が降るらしいね」という発話を引用する場合の例として(例文の番号は同書のまま)、

(29) — a 規子は「雨が降る」と聞いた。

(29) — b 規子は「雨が降るらしい」と聞いた。

(29) — c ? 規子は「雨が降るらしいね」と聞いた。

のような例を示し、「と聞く」の引用句には、判断のムードまではあらわれる。(中略)しかし、終助詞に託されるような伝達のムードまでは出てこない。少なくとも出てきにくいのである。」(316ページ)と述べ、さらに次のように説明している。

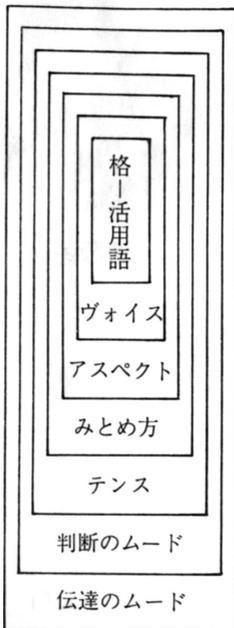
他からの発話等による情報の受容の際には、発話されたコトバ全体がすべて情報として大切なわけではない。大切なのはその発話等で伝えられる事柄内容、文について言えばその事柄意味を担うコト(Proposition)の部分であり、「聞く」主体はまずその部分を把握するだろう。更に、「聞く」という場合、真偽未確定の情報がとり込まれるのだから、その事柄の確からしさにかかわる情報内容として、確言のムー

ドを伴うか概言のムードを伴うかという点も有用であり、把握の対象となり得る。しかし、発話に際しての対人的な伝達のムードは、伝達される事柄内容とは直接かかわらないものであるから、通常削除される。(中略)以上より、「聞く」には、その主体の取捨選択というフィルターを通しての主体的な情報受容、そして情報保持の行為という性格がはっきり認められる。

(317ページ)

藤田氏はこのようにムードの観点から説明しているのだが、では「なむ」はどのようなムードに属するのだろうか。

仁田義雄(一九八四)は次のような図を示し、



係結び現象は、判断のムードよりも外側、つまり伝達のムードに属するものであると考えられる。(130ページ)

と述べている。藤田、仁田両氏の述べるところからすれば、「なむ」は伝達のムードに属するのであるから、「聞く」の引用句が構成されるときに「なむ」は削除されることになる。しかし実際にはそうではない。「聞く」の引用句に「なむ」があるという現象はどのように説明されるべきか。

今一度(11)および(29c)について考えたい。これらの例が不適合であるのは、そもそも「ね」のついた文は「言う」で受けるべきものであって、「聞く」で受けるべきものではないということを見せているのではないか。それは言うまでもなく「ね」に聞き手指向性があるからであって、聞き手に向かってはたらかけるものだからこそ、それを受けけるのは「言う」が当然だということである。

ここから考えて、「なむ」が伝達のムードに属するとしても、「なむ」が「聞く」の引用句にあるということをムードの観点から説明するには無理があると言わざるを得ない。やはり「聞き手指向性」を手がかりに考えるべきだろう。

三

聞き手指向性という点からいえば、命令文はその性質をもつ最たるものである。そこで、命令文を引用する際にどのような動詞で受けるかを見てみると、おおよそ次のようになる。

(15) 「……三井寺にそれがしといふ僧にあつらへて、書き
供養せさせて給べ」といひて、

(宇治拾遺 一〇二) 289)

(16) 「しづまりぬなり。入りて、さらばたばかれ」とのた
まふ。

(源氏 空蟬 89)

(17) まわり給へとあれど、寝たるやうにて動きもし給はず。

(源氏 少女 311)

(18) 「殿の寝入り給ひなむに、天井より鉾を指下せ。下
にて取宛てむ時に、只指せ」と侍つればなむ」

(今昔 卷二十九の十三) 326)

(19) 「御足給へ」と候へば、参りつるなり」と言ふ。

(宇治拾遺 十八) 62)

このように「言ふ」「のたまふ」「あり」(およびその敬語形)

に限られるようである。要するに「聞く」で受けることはないのであって、「聞く」を用いる場合は、

(20) 健勝も「返ね」と宣ふを聞き、膝を屈かがめ蹄を舐て、
(今昔 卷一の四 20)

(21) 「尋ねよ」といふを聞て、此埋たる男出来て、人よりも勝れて泣求め騒ぐ。
(今昔 卷二十六の五 25)

(22) 「……其れ我れに得させよ」と言ふを、(欠字)聞くに目も暗て、
(今昔 卷二十九の二十五 348)

のように、一旦「いふ」(およびその敬語形)で受け、それを「聞く」で受けるという形をとる。命令文を直ちに「と聞く」で受けることはないのである。

これは現代語でも同様であり、

(23)

(Aが)「ちよつと黙つてろ」と言つた。

* (Bが)「ちよつと黙つてろ」と聞いた。

(Bが)「ちよつと黙つてろ」と言われた(命令さされた)。

のような例で、それは知られる。

これによって命令文と、それを受ける引用動詞には相関

があるということも知られる。命令文は聞き手指向性をもつがゆえに、それが引用されるときは「言ふ(う)」「古語ではさらに「あり」など)で受け、「聞く」で受けることはないのである。^{註4}

では、ともに聞き手指向性を持ちながら命令文は「聞く」の引用句に入らないのに、なぜ「なむ」は入るのか。

四 結論

「聞く」の引用句になぜ「なむ」があるのか。本稿は、渡辺 実(一九七二)にいう「有形無実化」にヒントを得た。

渡辺 実(一九七二)は、

組合代表との話しあい

長崎への出張

ヨーロッパからの帰り途

ロンドンでの再会

のような例を示して、連用展叙するはずの助詞が「の」を伴って連体修飾の形になっており、「形態はあつても職能的には実質のないに等しいようなもの」となり「形態と意義とを残してその職能的実質を失」っているとし、これを

「有形無美化」と呼んでいる。(以上、同書168ページの記述による)

そこで「なむ」について言えば、「なむ」は引用句中にあっても係り結びが成り立っており終助詞的用法もあるのだから、見たところ引用句に入らない場合と何ら変わりがない。しかし、引用句中に入った「なむ」はそれが含むところの聞き手指向性が無効になっていると考えられる。

一方、命令文は、聞き手へのはたらきかけを本来の機能とするので「聞く」の引用句には入りえない。ただし、心話文に現れることがあり、その場合は、もはや聞き手指向性は無効になっているので、表す意味も「命令」から「願望」に変化している。

聞き手指向性を失った「なむ」は相手に向かってではなく、他から聞いたということを示す標識になっていると見ることができると。

以上、文体による差異が論じられることが多かった係助詞について、「なむ」を中心に引用の観点から考察した次第である。

注1

用例の中には次のようなものが一例見られた(大成本文が「聞き給ひし」とするところを諸本(新大系本・全集本・新編全集本・集成本)により「聞き給へし」に改めた)。

「下の人々のしのびて申ししは……：……さすがに心細くて居給へるならん」となんだこの十二月の頃ほひ申すと聞き給へし」と聞こゆ。(源氏 浮舟 1866)

この「なむ」は「申す」が結びのはずであるが、引用句の外で曲調終止を起こし「聞き給へし」となっている。小田 勝(一九九八)に言う「過剰な結び」の例である(ただし、同論文は「なむ」の例は取り上げていない)。

この例について言えるのは、この会話の主と引用の主が同一、つまり「聞こゆ」の主語と「聞き給へし」の主語が同じ(大内記)であるということである。同じであるから、聞いた事柄を聞き手へ向けて伝えるのに勢いで過剰な結びを生じさせたのであろう。

注2

使用したテキストは、源氏物語は大成本、今昔物語集は新大系本、宇治拾遺物語は集成本、とりかえばや物語は、鈴木弘道『校注 とりかえばや物語』笠間書院により、

他は大系本によった。ただし、引用にあたり漢字の当て方や句読点など私に改めたところがある。また今昔物語集は片仮名を平仮名に改めた。

注3

「なむ」の聞き手に向かう性質を論じた森野 崇（一九八七）では「伝達性」としていたのを、森野 崇（一九九二）で「聞き手志向性」に改称した旨断りがある。

注4

今昔物語集には、

「……其の時に、虚空に音有て、我れに告て云く、「汝
ぢ当に可知し。……汝ち本国に返る、速に聖人に此
の事を可告し」と聞つる程に、蘇て来れる也」と云
ふ。（今昔 卷13の6 213p）

のように、「べし」を用いた表現を「聞く」が受けた例が見られるが、この「可告し」は「告げるがよい」といった意味であり、また「虚空に音有て」であるから、そのように言うのが聞こえた、というように理解されるだろう。よって命令文を受けた「聞く」の例からは除外される。

注5

命令形が心話文に用いられた例については、近藤政行（一九九六）を参照。

参考文献

- 小田 勝（一九九八）「係助詞に対する過剰な結びについて」『国学院雑誌』九十九卷一号
- 近藤政行（一九九六）「動詞命令形の機能」〔徳島文理大学比較文化研究所年報〕第十二号
- 仁田義雄（一九八四）「係結びについて」『研究資料日本文法』⑤ 助辞編（一）助詞 明治書院
- 藤田保幸（二〇〇〇）『国語引用構文の研究』和泉書院
- 森野 崇（一九八七）「係助詞『なむ』の伝達性―『源氏物語』の用例から―」〔国文学研究〕九十二集
- （一九九二）「平安時代における終助詞「ぞ」の機能」〔国語学〕第一六八集
- 渡辺 実（一九七二）『国語構文論』塙書房